釣れ釣れなるままに

２０１０年思い出の釣行記 PART.　８

眠りの思想

鹿島釣狂

☆開 催 日	平成２２年１１月１４日			
☆開催場所	八雲～森港			
☆入釣場所	桂川			
☆釣　　果	カジカ	３７５	㎜	４
	アブラコ	３０１	㎜	４
	ガヤ		㎜	１
	重量	３５６	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１０３２	点（２魚種身長＋１０尾重量）	
	成績	１０	位	

眠眠打破

退職後の生活にも慣れて、釣り大会準備が先を見通して計画的に立てられるようになった。今回も、自分で作成した勤務計画に沿った午前勤務を終え、午後３時頃には最終的な準備が整った。本日の徹夜に備えてゴルフ中継を見ながらソファーに寝そべり微睡む。少し眠ったようだ。

「ザ・フィッシング」が始まった。飯を掻っ込みながら垣間見る。遠投カゴウキ釣りでブリやヒラマサを狙っているのだ。その釣り人のクーラーに「眠眠打破」の文字が見える。釣りの放映中にもチャッカリと映像として視聴者の脳裏に焼き付かせているのだ。自分は、いつものことのようにこの番組を見ながら戦闘モードに突入していく。眠眠打破して臨戦態勢を整えていくのである。

今年は、嵐氏と前野氏とで僅差の年間優勝争いをしている。二人とも今大会で転けた場合に限り私にも年間優勝の芽があるそうだ。まあ、その可能性は限りなく零に近いのだが・・・。嵐氏は落部に入るという。私は、昨年の大会で優勝を果たした鷲ノ木に前野氏と共に入る予定を立てている。釣り場は昨年の大会でおよその見当は出来ている。そんな話を前野氏としているとなんと吉井氏、長岡氏、堀内氏、西川氏までもが一緒に付いていくというのだ。隣に座ったボナさんによると、この釣り場範囲に匠釣会、函館釣り会、和光会、磯釣りクラブ、札幌手稲支部が熾烈な先陣争いをしているようだ。はたして釣り場の確保が出来るのだろうか。

和八氏を偲ぶ

和光会和八日出光記念大会が同じ区間で開催された。この大会は和光会の創設者で磯釣りをこよなく愛しながら永眠された和八さんを偲んで開催されることになったという。和八さんといえば２００５年５月１５日、ワスリで共に並んでの釣行が思い起こされる。私にはこのたった一度の出会いしかないが強烈な印象を受けた方だった。当時の記録をさかのぼりご冥福を祈りたい。

１時４５分、床丹の方からヘッドランプの灯りが列になって揺れながら続々と近づいてきた。本日は北海道釣り連盟の大会が床丹のすぐ先の永豊漁港で受付を済ましてから歌島漁港までの範囲で開催されているのだ。ランプの数から２０名ほどが近づいて来ていたのだが、その灯りの一つ一つが岩場の先に出て行っては落ち着き、さらに、何名かが私の所にも立ち寄ってはため息をつきながら先の岩場へと展開していった。

そのため息が何を意味するのか分からないが、これで私が移動する場所はなくなってしまった。そうなってみると、最後までここにどっしりと構えて釣りを楽しもうと心が落ち着いてきた。

年配の御仁が竿を出している私の前に来て海を眺め、すぐ左に陣取った。ベストの背中に和八日出光の赤い刺繍がある。

「隣に入らせてもらうよ。どっちに投げている。そしたら、ワスはこっちに打つからな。釣れてるかい？」

「いや一駄目ですね。ローソクボッケが１匹あがっただけです。和八さんのお名前はよく存じ上げております。新聞の釣り欄ではいつも上位の成績を上げているので気になっていました。お会いできて嬉しいです。是非、ご指導下さい」

「ワスのこと知ってるかい。永いこと釣りしているからなぁ」

「『和光会』の『和』は『和八』の『和』なのですか？　すると『光』は『日出光』の『光』をとったわけですね。『和光会』は和八さんが興した釣り会なのですね。背中の彫り物は自分の身分を背負（しょ）っているようなもので、窮屈でしょうね。会員はどれ位いるのですか？」

「昔は大きな所帯だったが今は減ってきた。年寄りは逝っちゃうし、若いもんはわがままで、仲間との釣りを嫌ってるようだ」

「歳を伺ってもよろしいですか？」
「７０になる。ワスも年老いてきたのでみんなに迷惑を掛けるようになってきた。そろそろ引退も考えなけりゃいけんようになったが、釣りばっかりはなぁ」
「７０には見えません。何時までもがんばってくださいね。年間、どれくらいの釣行なのですか？」
「昨年は１５回ぐらいだったが、昔は年間４０回位も通ったものだ。釣り歴も４０年ぐらいにはなるかな」
「よく、暇とお金が続きますね。私は年７回の大会に参加するのが精一杯で、特に出費のことを考えると頭を抱えてしまいます」
「ワスは特殊な技術をもった鉄工所をやっていた。今は経営を息子に譲ったが、釣りをするぐらいは何とかなるもんだ」
「和八さんは、淡水もやると聞いていますが」
「茨戸川での鮒釣りや鯉釣りも熱心に入れ込んだもんだ。鯉釣りは待ちの釣りだから、一本の大物を求めて何度も通い粘る。そして、狙い通りその１本をあげた時にゃ、満足感というか、達成感というか、そんなゾクゾクした気持ちに痺れてしまうんだ。やめられないねえ。」
「今日の釣りは、どうなるでしょうか。」
「海底の岩がくっきりと見えるぐらい潮が透き通っている上、べた凪なので、苦戦するぞぅ。ほら、お前さんの竿先揺れているぞ。」
「いいアタリでしたが、すっぽ抜けました。」
「今日は食い渋っているので、早合わせは禁物だぞ。我慢して十分食わせるようにせにゃあかん。先程から次から次へと聞いてくるので、素人だと思っておったが、あんたの仕掛はなかなか凝ったものだね。エサは何を使っているかね。」
「イカゴロとカツオが中心です。他にイワムシとイソメとエビと・・・」
「何を狙っているんだい。」
「カジカとアブラコです。」
「ここではカジカは難しいぞ。アブラコなら何とかなると思うんだが・・・」
「和八さんのエサはすごいですね。イワムシが真っ赤で新鮮そうです。マキエは何を混ぜ込んでいるのですか。すごい臭いがしますが・・・。」
「マグロが中心だ。それに色々とね・・・。魚に合わせて色々と調合しとる。お前さんは甘エビを使っているようだが、ワスはブラックタイガーがエサ落ちしないので使うようになってきた。あんたが乗っている岩の手前が深く抉(えぐ)れているので垂らし釣りでやるとアブラコが来ると聞いている。竿を１本、捨て竿にしておくといいと思うんだがなあ。ほら、この辺りだ。」
「ありがとうございます。なるほど、ここだけが深く抉れているようです。」
「来ました。来ました。いいアタリです。やっと来ました。アッ、なあんだ。ガンジでし

た。」
「随分大きなガンジだね。それがアブラコだとよかったんだが、残念だったね。諦めずに続けなさい。」
「イカゴロネット仕掛けをぶち込んでいるのですが、底の方から油がポワッ、ポワッと浮いて来て、虹色の油膜を広げています。その周りにタナゴが群れだしてきました。タナゴは必要ないので、竿を上げて遠投します。」
　そんな気楽な会話が延々と続いた。
　ルアー竿の先に黒っぽいワームを付けた若い釣り人が現れ、そのタナゴを発見して竿を振った。何度かやっている内に２５㎝ほどのタナゴを釣り上げ、大声を上げて仲間を呼んだ。仲間がやってきて今度はブラーで底を探っている。間もなく、ブルブルと竿を曲げて３０㎝近いクロガシラを釣り上げた。例のように和八さんが話し掛ける。
「あんた名人だね。よく釣り上げたね。どこの釣り会？」
「豊平ブロックです。連盟の大会に参加しましたが投げ釣りには慣れていないので、ブラーやワームで狙っています。これなら自信があります。５０㎝程のアブラコも上げたことがあります。」そう言って、フラシに魚を入れるためにその場を離れた。
「鹿島さん。だから諦めないで捨て竿をしておきなさいと言ったでしょう。クロガシラは同じ所にたまる傾向があるから捨て竿しなさい！」
「また、戻ってくる様子なのでここは諦めました」
　先程の若者が戻ってきてブラーで探りを入れている。和八さんに言われたこともあり、気が気ではなく見守っていると、竿先が鋭く突っ込んだ。何やら長いものが海面で暴れている。「アブラコだ！」と若者が大声で叫ぶ。アブラコと聞いて、いやな予感は的中し、また何か和八さんに言われるだろう。しかし、あがってきたのはこれまた５０センチ近いガンジであった。変な話だがホッと胸をなぜおろす。その若者は何事もなかったかのように、違う離れ岩へと身軽にヒョイヒョイと渡っていった。
「４０ｍ 程先に頭を出している大きな根の向こうにアブラコがいそうだよ。是非、投げてみなさい。」
「あの根の向こうにですか？　たとえアブラコがかかったとしても、私にはあの岩を乗り越えさせる自信がありません。」
「根の向こうは多分抉れていて、魚がいるぞ。ワスなら１本バリにして投げるのだがなあ。魚が付いたら一気に巻き上げるとあの岩ぐらいなら簡単に乗り越えそうだがなあ。」
　岩の向こうには手を付けられそうもないので、その岩の周りを何度探っても大物アブラコは現れなかった。ホッケは沢山釣ったが大物がこれまたいない。他に、クロソイ、ハチガラ、ガヤ、真ガレイ、砂ガレイ、アブラコ、タナゴ、カジカ、ガンジと１０目釣りだが小物ばかりだ。なんだかんだと和八さんの会話を楽しんでいるうちに、時間だけが刻々と過ぎていってしまった。成績の方は散々であったが、これもまた私の楽しい釣りの思いでの１ページを飾ることになるであろう。（２００５年岩見沢釣遊会第２回大会より）

眠りの思想

鷲ノ木に着いた。釣り人は誰もおらず私は昨年度優勝した所に竿を構えることが出来た。西川氏は一旦、湯の先に向かったが、崖で下りられる状態になく戻ってきてしまった。結局、桂川から鷲ノ木漁港にかけて吉井、前野、鹿島、長岡、堀内、西川と並んだ。

入釣時が干潮時間帯だったためかテトラ周辺が随分と浅くなっている。しかも本日は昨年より潮の動きが少ないためか全くアタリが出ない。昨年は入釣後すぐにアブラコ、カジカと次々に釣れたのだが・・・。

自分の竿に集中できなくなり周辺の様子が気になり出す。右隣に入った長岡氏の竿先が鋭い当たりを告げて、大きく煽った竿が根元まで曲がった。どんな獲物だろうと駆けつける。すると、大口を開けたカジカが波打ち際で体をひねった途端にハリが外れ、その反動で長岡氏がもんどり打って倒れてしまった。カジカはと見ると２０㎝程の浅い波打ち際で自分に何が起こったのか分からずに未だ彷徨っている。咄嗟に駆け寄り、海水に両手を突っ込んでずっしりとした重みを感じながら掬い上げてゴロタ場に放り投げた。無我夢中での咄嗟の行動だったが仲間の釣果に元気が出た。さらに長岡氏はタカノハを釣り上げたがわずかに３５㎝には届いておらず、リリースすることになった。

私は、その後移動することもなく丹念に打ち返したが１時間に１匹といった釣れ具合だった。明るくなってからカジカ３７㎝が来たのが最大で、カジカ４匹、アブラコ４匹、ガヤ１匹と結局９匹の釣果で規定の魚を揃えることが出来なかった。

審査結果

優　　勝	阿部雅美	１５４５点	(ｱﾌﾞﾗｺ371㎜+ｶｼﾞｶ 370㎜+8040g)	山　越
準優勝	桑原　理	１５３０点	(ｶｼﾞｶ 407㎜+ｱﾌﾞﾗｺ324㎜+7990g)	山　越
３　　位	岩本　満	１５０９点	(ｶｼﾞｶ 407㎜+ｱﾌﾞﾗｺ333㎜+7690g)	山　越
４　　位	小野田正男	１４８６点	(ｶｼﾞｶ 390㎜+ｱﾌﾞﾗｺ381㎜+7150g)	山　越
５　　位	南　　勝	１３２５点	(ｱﾌﾞﾗｺ398㎜+ｶｼﾞｶ 370㎜+5520g)	由　追
身長優勝	嵐　光博	アカハラ４１０㎜		落部川

今回は交綸会組にしてやられてしまった。熟知した山越の海岸でカジカを大漁してきたのだ。帰りのバスの中でその成績に悶々としている内に深い眠りについてしまった。目を覚ますと、ボナさんが「バスの中で寝てしまうと、その夜が眠れないので起きているように努めている。」とおっしゃる。その話に頷いている仲間も多い。私はといえば次の勤務に差し支えないようにと出来る限り眠りにつこうと思うのだが・・・。いや、そんなことをせずとも意識を失ってしまうかのように眠ってしまうのだ。釣りに行く前の日も大会での徹夜に備えて、なるべく早く眠るようにしたり、出発日も余裕があればソファーで目を閉じていると１時間ぐらいは眠れたりするのだ。

帰りのバスの中で眠るのも、今晩の分を眠るというのではなく、一睡もしないで過ごした分を取り返しているのである。今回も、魚の処理は明日に回して、風呂に入り、酒を飲

み、ウダウダとしているうちに深い眠りについてしまった。

「眠り」というのは単なる休息だけではないような気がする。身体を動かさず、脳も働かせず、意識を失って外界から自分を遮断させ、夢という内面の世界へ逃避する。眠っている間にあの世に旅立ってしまうような錯覚さえするのだ。目が覚めていたのなら何か事故があって死んだとしてもその死の瞬間は感じることが出来るだろう。しかし、眠るということでその瞬間さえ気づかずにそのまま明日を迎えてしまうことだってあるのだ。つまり、亡骸としての自分である。もうその時は夢の中の自分なのか、あの世にいる自分なのかさえも気づかないのだろう。

この釣行記を書いている今も私は眠たい。そしておそらくこの後「明日も無事に目が覚めてほしい」と願いながら眠るのだろう。それがいつまで続くのだろう。歳を重ねるにつれていつかは「このまま目が覚めないでほしい」と思う日が来てしまうのだろうか・・・。